

工業の発展の三つの段階

小商品生産、資本主義的マニュファクチュア、機械制大工業

さきにあげた工業の三つの基本的形態は、なによりもまず、技術構造の相違によって区別される。小商品生産は、太古からほとんど不変のままであった、まったく原始的な手工的技術を特徴としている。営業者は依然として農民であって、彼らは原料の加工方法を伝統によって踏襲している。マニュファクチュアは、分業をもちこむが、この分業は、技術の本質的な変革をもたらし、農民を職人に、「部分労働者」に転化させる。しかし、手工的生産は依然として存続している。そしてそれを土台としているかぎり、不可避免的に、生産様式の進歩は非常に緩慢なことを特徴とする。分業は自然発生的に作りあげられ、農民の仕事と同じように、伝統によって踏襲される。機械制大工業だけが根本的な変化をもたらし、手工的技術を投げすてて、生産を新しい合理的な原理にもとづいて改造し、いろいろの科学を生産に組織的に応用する。……………

技術構造の相違と関連して、われわれは、資本主義の種々異なる発展段階をみる。小商品生産とマニュファクチュアとは小企業経営の支配ということの特徴としており、そして、このなかからわずかに少数の大企業経営が分離してくるだけである。機械制大工業は、終局的に小企業経営を駆逐する。資本主義的諸関係は小経営のなかにも形成されるが（賃労働と商業資本をもつ仕事場の形で）、しかしここでは、それらの関係はまだ発展が微弱で、生産に参加している人々の諸群のあいだにおける鋭い対立のうちに固定されてはいない。ここではまだ大資本もなく、プロレタリアートの広範な層もない。だがマニュファクチュアにおいてはわれわれはそのどちらもが形成されるのをみる。生産手段の所有者と働き手とのあいだの溝は、すでにかんがりの規模にたつする。「豊かな」工業町が成長してくるが、そこでは大部分の住民はまったく無産の働き手となっている。原料の購買と生産物の販売とで、巨額の金をうごかしている少数の商人と、その日ぐらしの生活をしている部分労働者、これがマニュファクチュアの一般的な光景である。しかし多数の小企業経営の存在、土地との結びつきの存続、生産および全生活構造のなかでの伝統の存続、すべてこれらのことは、マニュファクチュアの両極のあいだに多くの仲介者的分子をつくりだし、これらの両極の発展を阻止する。機械制大工業にあつては、すべてこれらの阻止的要因はなくなる。社会的対立の両極は最高の発展をとげる。資本主義のすべての暗黒面があたかも一カ所に集積されているかようになる。機械は、周知のように、労働日の法外な延長に大きな刺激をあたえる。婦人と子供が生産にひきいられる。失業者の予備軍が形成される（また工場制生産の諸条件からして形成されないわけにはいかない）等々。しかし、工場によって巨大な規模で行われる労働の社会化と、工場で働く住民の感情および観念の改造（とくに、家父長制のおよび小ブルジョア的な伝統の破壊）とは、反動をよびおこす。機械制大工業は、それ以前の段階とはちがって、計画に則した生産の規制と生産にたいする社会的統制とを、緊切に要求する（この傾向の現れの一つは工場立法である）。

生産の発展の性格そのものは、資本主義の種々の発展段階で変化する。小営業においては、その発展は農民経営の発展のあとにしたがってすすむ。市場はきわめて狭く、生産者と消費者との距離は大きくなく、とるにたりない生産規模は、ほとんど増減しない地方的

需要にたやすく順応する。だから、最大の安定性ということがこの段階における工業の特徴であるが、しかしこの安定性とは、技術の停滞、および、中世的な伝統のあらゆる遺物によってしばられた家父長制的社会関係の保存と、同じことである。マニユファクチュアは大きな市場めあてに、ときには全国民をめあてに作業する。これに応じて、生産は資本主義に固有の、不安定な性格をおびるが、この性格は、工場にあっては最大の強さにたつする。機械制大工業の発展は、飛躍によるよりほかには、また繁栄の時期と恐慌の時期との周期的交代によるよりほかには、すすむことができない。小生産者たちの零落は、工場のこの飛躍的成長によって、いちじるしく強められる。労働者は、熱狂期には大量に工場に吸引されるかとおもうと、ほかのときには押しだされる。機械制大工業の存在と発展との条件となるものは、失業者と、どんな仕事でもやろうとまちかまえている人々との膨大な予備軍の形成である。 ……………

工業の最初の二つの発展段階は、住民の定着性を特徴とする。小営業者は農民としてとどまっており、土地経営によって自分の農村に緊縛されている。マニユファクチュアの職人は、普通マニユファクチュアがつくりだす小さな封鎖的な工業地方につながれたままでいる。その発展の第一および第二の段階における工業の構造そのものうちには、生産者のこの定着性と封鎖性とを破壊するようなものはなにもない。いろいろの工業地方のあいだの交流はまれである。他の地方への工業の移動は、新しい小営業を国の辺境地方に創設する個々の小生産者たちの移住によってのみ、行われる。これと反対に、機械制大工業は必然的に人口の移動性をつくりだす。個々の地区のあいだの商業的交流は、大いに拡大される。鉄道は移動をたやすくする。労働者にたいする需要は、熱狂期には高まり、恐慌期には減退しながら、全体としては増大していく。そこで、ある企業経営から他の企業経営へ、国の一隅から他の地方への労働者の移動は、必然的となる。機械制大工業は一連の新しい工業中心地をつくりだし、それらの中心地は、かつて見られなかったような速さで、ときには人も住まなかった地方にでも発生するが、このような現象は、労働者の大量の移動なしには不可能であろう。 第三巻 第七章 機械制大工業の発展 P574~579

コメント

機械制大工業は、工業の最初の二つの発展段階と比べ、次のような特徴がある。

- ① 機械制大工業だけが根本的な変化をもたらし、生産を新しい合理的な原理にもとづいて改造し、いろいろの科学を生産に組織的に応用する。
- ② 機械制大工業は、小企業経営を駆逐するとともに自分に従属させ、支配下に置き利用する。(後段、青山加筆)
- ③ 機械制大工業にあっては、資本主義へのすべての阻止的要因はなくなり、社会的対立の両極は最高の発展をとげる。機械の導入は、労働日の法外な延長に大きな刺激をあたえ、婦人と子供が生産にひきいれられ、失業者の予備軍が形成される等々。
- ④ 機械制大工業は鉄道を発展させ、商業的交流を拡大し、労働者にたいする需要は全体としては増大していく。ある企業経営から他の企業経営へ、国の一隅から他の地方への労働者の大量の移動が必然的となり、一連の新しい工業中心地をつくりだす。このような現象は、労働者の自由な移動を前提とする。